

## より流動的な「パス&ゴー」を可能にするためのコーチング法の探求 — フランスI.N.F.(国立サッカー学院)の現地調査より —

中村 泰介<sup>1)</sup>

### 問題の所在

#### 「なぜ「パス&ゴー」に着目するのか？」

日本サッカー協会は、1964年に開催した東京オリンピックの強化プロジェクトとして、デットマール・クラマー (Dettmar Cramer, 1925-) 氏を迎え入れた。クラマー氏の指導の下、日本代表のみならず、日本サッカー界は目覚ましく飛躍してきた。近年、日本サッカー界は、各年代における世界大会で着実に成果をあげてきた。しかしながら、現状は、世界強豪国のサッカーのレベルは更に加速している (布, 2010, pp. 9-15)。そして、日本が飛躍するための課題の一つとして、本調査研究が着目する「パス&ゴー」<sup>1)</sup>のプレーが挙げられる。

田嶋は、クラマー氏が指導した当時を振り返り「クラマー氏が指導した「パス&ゴー」というコーチング用語の本質が果たして日本サッカーにしっかりと伝わっていたのであろうか」と指摘している。さらに、当時日本のサッカーは黎明期ということもあり「パス&ゴー」と耳にただけで「パスしたら動く」だけのものという単純な解釈を行っていたのではないか (田嶋, 2008, pp.149-159), という疑問を提示している。クラマー氏が意図した「パス&ゴー」の本質が、当時その指導を受けた選手にどのように伝わったのか、を改めて検証する必要があるのではないだろうか。技が人から人に「伝承」する様相について、鈴木は、「本来は動的な性格をもっていたダイアグラムも、それを伝承する際にしばしば静的なもの、いかなる状況にも対応できるオールマイティなものとして持ち上げられ、その本質を失ってしまう。伝統を継承するというときに常に問題となること、それは伝統の何をどのように継承するかということである」(鈴木, 2006, p.218) といっており、その観点からみれば、田嶋のクラマー氏の指摘、すなわち「パス&ゴー」の本質が違う形として伝承されたかもしれない、という指摘は現在の課題としても極めて重大な事柄であると考

えられる。

以上のような問題関心から本調査研究は当時クラマー氏から伝承された「パス&ゴー」という一つのプレーに着目して、さらにより流動的な「パス&ゴー」を導きだすためのコーチング法を考察するために、世界が注目し、そして日本サッカー協会もモデルとしているフランス国立サッカー学院 (これより「I.N.F」と表記する) にて育成のプロフィショナルが行う「パス&ゴー」に関するコーチング法、コーチングの調査を実施し、分析した。本調査は、日本サッカー界が目指しているプレー (動きながらの技術) の一つの手がかりになると考えられる。

### 本調査研究への着想及び事前調査

より流動的な「パス&ゴー」を考察するに先立ち、筆者らは2006年FIFA-Wcupドイツ大会の試合をキック動作の視点より分析し<sup>2)</sup>、「Dynamic」なキック動作が多いチームが優位なゲーム運びを展開する一要因であることを報告した。事実、予選敗退した日本代表は「パスしたら動く」 (=パス&ゴー) プレーが課題であると報告されている。また、指導言語に関することばの捉え方の調査では、指導者が動きやすいとイメージする「パス&ゴー」と選手が受け取るそれとでは「ズレ」が生じる結果となった (中村・日野, 2009)。以上の調査結果等から示唆をえて、本研究の現地調査を実施した。

#### フランスI.N.F.の現地調査の詳細

日時：2009年12月7日～12月16日

場所：フランス国立サッカー学院 (I.N.F.)

対象：1年生選手21名 (13歳)

2年生選手21名 (14歳)

3年生選手20名 (15歳)

育成コーチ2名 (40代, 60代)

選手は各学年フランス全土1500人から選抜された

1) 聖トマス大学

20人である。各90%~95%プロの育成センターへ進み、最終的には20人中の7人くらいがプロ選手となる。育成コーチは、育成のプロフェッショナルとして学院に従事しており、かつては代表、プロ選手としてのキャリアを持ち、多くのフランス代表選手を育成している。

内容：①指導現場の撮影及びコーチングの録音（仏語から日本語へ同時通訳）

②選手を対象にコーチング用語（「パス&ゴー」）についての語彙の収集

- i パスのあと「動く」際のイメージの聞き取り go (va), move (suit), run (cours)
- ii より流動的な「パス&ゴー」を成功させるためには

③育成コーチへの聞き取り<sup>3)</sup>

- i 指導者として大切なもの
- ii コーチングで大切なもの
- iii より流動的な「パス&ゴー」(passé et va, passé et suit, passé et cours) を導くコーチング

### 流動的な「パス&ゴー」の手がかり

本稿では、内容の②と③より報告する。

#### I 選手の「パス&ゴー」に関するイメージ

内容の②の結果として、以上（表1）の語彙を収集できた<sup>4)</sup>。「移動するべきところに移動できた」や「リターンパスがうまくきた」「味方プレイヤーが動いていた」などのことばからは、フランス流のパス回しの特徴の一つに「パスを引き出す（受け手が）」というプレーイメージがあり、「パス&ゴー」を自ら行う

ということと、同時に、「パス&ゴー」を味方選手にさせる、というプレーイメージも含まれていることがうかがわれる。表1の語彙は今後十分に検証する必要があるが、I.N.F.所属選手の「パス&ゴー」に対するイメージを「言語」という形式で収集できたという点からは貴重な資料となると考える。

#### II コーチの聞き取りによる「パス&ゴー」

ここでは、内容の③から報告する。育成コーチへの聞き取り調査は、1年生コーチと3年生コーチの二名に実施した。質問事項は、i 育成コーチとして大事にしているもの、ii 指導者として選手に発するコーチングで大切なこと（タイミングの問題）、iii より流動的な「パス&ゴー」のプレーを可能にするためには、の三点であった。今後、調査研究としてデータ数を増やしていくことが課題ではあるが、質的なものとして本調査のデータは貴重なものと考えている。iiiの流動的な「パス&ゴー」を可能にするには、という質問では以下のような回答を得た。

「パスを出した瞬間にはappui アッピュイ（ボール保持者よりも前方にサポートする動き）appel アペル（攻撃方向の相手陣地の奥裏でボールを受ける動き）soutien スチアーン（ボール保持者より後方でサポートする動き）の三つのうちどれかを選択しなければならぬ。もしどれも選択していなければプレーは止まってしまう」。 (1年生コーチ)

このように、パスした瞬間には常に三つの選択肢を選手にイメージさせ、いずれかのプレーに繋げる。こ

表1 より流動的な「パス&ゴー」を導くための語彙の収集

いいパスコースがあった	相手チームを不安定にできた
味方プレイヤーが動いていた	オフサイドにならないようにできた
パスした後も動けた	移動すべきスペースがあった
リターンパスがうまくきた	相手プレイヤーのマークがなかった
状況判断がうまくできた	ゴールとの距離が適切だった
移動するべきところに移動できた	味方プレイヤーの後方サポートがあった
うまくボールをコントロールできた	ボールタッチを少なくできた
相手チームのポジションが悪かった	パスする味方プレイヤーの距離が適切だった
サイドでプレーを展開できた	体力的に元気にできた
ボールを持ちすぎなかった	やる気があった
マークを外す動きができた	トレーニングが十分にできていた

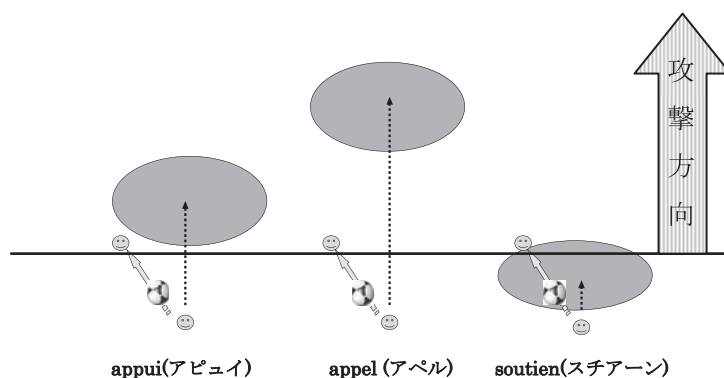


図1 I.N.F.コーチにおける「パス&ゴー」選択の一例

のイメージを包含させた「パス&ゴー」のコーチングが必要である。

「様々な練習方法があり技術からも戦術からも教えられる」. 「パスしたら動く」ではなく、「パスしたらどこに動くのか」(passé et va où?) が最も大事であり難しいのである. (3年生コーチ)

日本人の課題とされている「パスしたら動く」というプレーに対してフランスは「パスしたらどこに動くのか」が大事である, というように, 「パスしたら動く」ということはI.N.F.では当然あたり前のこととして認識されている. また, 「言語」と「パフォーマンス」の関係から若干の考察を加えると, 選手に伝わる語感として, 「パス&ゴー」を「パスしたら動く」と日本語にすることは, 「& (and)」を「したら」と訳しており, それはつまり動作, 作用, 現象がすでに完了している状態をさしている(中村, 1994, pp.19-20). 一方, 「いま・ここ」から「パスがだされる」という状態を表現するには, 「パスする」, や「パス」などが適当であると考えられる. このように観点を変えて, 「その作用が実現する過程を軸」<sup>5)</sup>として捉えることにより, ことば(=コーチング)の「イメージ」も異なってくると考えられる(この点に関しては今後の課題とする).

指導法としては, 「テクニック(技術)」からも「戦術」からも教えられる, という回答があったことから, すなわち両者を含んだコーチング法, コーチング(=ことばかけ)であることが求められていると考えられる. 練習の一例として, 3人組縦列で行うキックトレーニングがある. キックの技術を向上させることは勿論であるが, しかしもっとも重点を置いているこ

とは, キック動作直後のプレーにどのように関わっていくのか, という観点から多くの指導或いはコーチングがなされていたように見受けられた. すなわち, キック動作(=技術)と次のプレー(=戦術)が繋がっていることが重要であり, I.N.F.のトレーニングでは, 常にこのことが強く「イメージ」されたものであったということである.

## まとめ

- ・ 「パス&ゴー」直後のプレーにどのように関わっていくのか, というコーチング(ことばかけ)であった(さらに深い検証を要する).
- ・ 「技術」と「戦術」の両者を捉えたコーチング法, コーチングであった.
- ・ ボール保持者だけでなく, ボールの受け手が「パス&ゴー」させるというイメージの共有がある.

## おわりに

「われわれの世界に固有なコーチングだとか, 教育だとか, 実践の場で創られてくる知識, 情報が, 「科学的ではない」ということで切り捨てられるのは, いかにももったいない」.<sup>6)</sup> 日本体育学会60周年記念座談会の中で出てきたことばである. 実際に指導現場の名人といわれる人たちのフィールドにおいては, 最終的に「指導」「コーチング」の寄りどころとしているものは自らの経験値からくる実践の「知」である, といってよい. その「知」は研究のフィールドに乗せることが困難なこともあり, 「科学的ではない」と片付けてしまっている(しまわれている)嫌いがある. しかし現場で生きる「知」こそ, 理論と実践の問題を乗

り越えた「知」<sup>7)</sup>であるべきである。その「知」を如何にして研究の中に提示し、さらには養成できる可能性を探れるのであろうか。「分析できないものを分析していく」というスタンスに本調査研究の出発点があったこと、そして、I.N.F.の現場で捉えようと試みたものは、まさに分析困難なその人独自でなされる「勘」や「コツ」といわれるものとともに連動してくる技として働くコーチングの「知」である。今年度はスペインにて同調査を実施し、本報告と比較検討し、さらに深く考察していきたい。

## 註

- 1) 日本では「パス&ゴー」「パス&ムーブ」「パス&ラン」が混合して用いられており、それを総称して本稿では「パス&ゴー」とする。しかし、クラマー氏は「パス&ムーブ」がより本質を得ている、と説明している。「技の伝承-伝えたいこと・伝わったこと-デットマール・クラマー氏のまなざしで見た日本サッカーのあゆみ」(2008年3月17日、京都大学清風荘、科学研究費補助金基盤研究B「技の伝承」代表者鈴木晶子、主催河端隆志、小田伸午)
- 2) 全15試合のキック動作解析(「Dynamic kick」・「Stationary kick」)を通じて、キック動作のパフォーマンスが試合展開の優劣になんらかの関連性があることを明らかに報告した。(中村ほか、2008)
- 3) 本調査の聞き取りの手法として、対話構築主義アプローチの態度をとり、語りの主導権を語り手に委ね、「何を」語ったのか、に注目する一方「いかに」語ったのか、という語りの様式にも注意を払い実施した。(桜井厚(2002)インタビューの社会学。せりか書房：東京)
- 4) 収集方法は作成した「パス&ゴー」に関するVTRを鑑賞してもらい、「技術面」「戦術面」「精神面」のいずれかの視点より「なぜ成功したのか」、を自由形式にて記述してもらった。その結果135個の語彙の収集に成功し、22個の項目に整理した。フランスサッカーに造詣の深い1人、データ分析及び統計の専門体育研究者1人、報告者(中村)1人、計3人で重複チェックを行った。特にI.N.F.所属選手の動作がどのような形で言語として導き出されたのか(牽引力)、という点に注意を払った。今後はこの項目を各年代サッカーチームで調査を実施し、因子分析により、サッカー競技における形成的評価票を作成し検証していく予定である。
- 5) 花のつぼみが「咲く」や「咲いた」もほとんど区別はないが、観点を変えて、その作用が実現する過程を軸として捉

えなおすと、「咲く」では花のつぼみが開くという現象がまだ実現していないのに対して、「咲いた」は花びらの開いた姿が現実、完了したことを示す。(中村、1994)。

- 6) 2009年9月、日本体育学会60周年記念の座談会の中で、体育学らしい研究の今後の展望について、体育学各研究領域の第一人者が集い多くの議論がなされた。(福永哲夫(2010)日本体育学会60周年記念誌。社団法人日本体育学会：東京)
- 7) 理論とは普遍一般へ、実践とは特殊個別へ向かう傾向がある中において、ここでいう「知」とは、理論と実践を結び、決して言語化されないような技能の「知」、ヘルバルト(J. F. Herbart, 1776-1841)の「教育的タクト」、或いはポランニー(M. Polanyi, 1891-1976)の「暗黙知」などが捉える、いわば「臨床の知」(中村雄二郎)に示唆を得たものである。こういったことから、本調査の問題は、教育学、或いは理論、実践を問題とする学問領域へ接続し、より深く考察できる可能性があると考えている。

## 文献

- 松原英輝(2007)フランス・ナショナル・フットボール学院における選手育成コンセプトとその実態。旭ヶ丘スポーツ講習会資料。
- 中村 明(1994)センスある日本語表現のために。中央公論社：東京。
- 中村泰介・河端隆志・小田伸午・進矢正宏(2008)サッカー競技におけるパフォーマンスを考える-2006年FIFA ワールドカップ ドイツ大会の現地調査とキック動作分析から-。聖トマス大学人間文化、11：155-167。
- 中村泰介・日野公美子(2009)「身体のパフォーマンス」から考える身体技法の修得に関する一考察-指導者と生徒・児童の言葉の捉え方のズレに着目して-。第68回日本教育学会大会 研究発表要項。pp.238-239。
- 日本サッカー協会監修(2007)2006 FIFAワールドカップ ブドイツ JFAテクニカルレポート。データスタジアム株式会社：東京。
- 布啓一郎(2010)「リーグ文化の醸成」Technical news Vol.36 日本サッカー協会：東京、pp.9-15。
- 鈴木晶子(2006)イマニエルカントの葬列。春秋社：東京。
- 田嶋幸三(2007)「言語技術」が日本のサッカーを変える。光文社：東京、pp.149-159。

## 付 記

本調査は、科学研究費補助金若手研究(B)2009年~2010年の補助をもとに実施した。